

戦争体験の証言と講演の集い

戦後もすでに60年を過ぎて、あの戦争で“じっさいに何があったのか”を自分の耳で聞く機会はほとんどなくなってきています。この度証言してくださる久保寺尚雄さんは昨年、帰国後50年の沈黙を破って真実を語りはじめられました。

第1部 私の経験した戦争犯罪と反省

証言者 久保寺尚雄さん(1920年8月生 秦野市在住)

第2部 日中戦争の傷跡と人間性

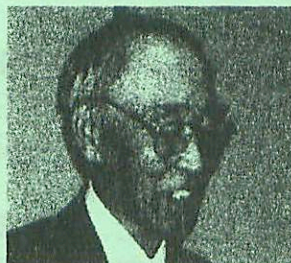
講演者 姫田光義さん(1937年生 中央大学教授・中国近現代史)

日時 5月13日(日)13時30分より

場所 かながわ労働プラザ (JR石川町駅3分) 第3会議室

資料代 500円

秦野の農家の長男に生まれた久保寺さんは臨時召集を受け、昭和17年4月に中国山東省済南で新編成の第59師団に入隊し、鋏を銃に持ちかえたのでした。そこで体験したことは「劳工狩り作戦」であったり、住民虐殺に加わることでした。「自



分は“戦争とは軍隊と軍隊との兵器による殺し合い”の

ことで、たとえば地区でも、住民、子供まで殺すことになるとは夢にも思ってもいませんでした。」と語っておられます。

1920年8月の生まれですか
です。いまも生まれ育った土地を離れることなく、暖かい日は鋏を手に畑に出て、家族で食べるための野菜を育てておられます。

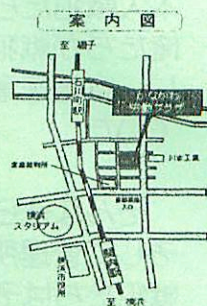
ら今年誕生日を迎えると87才

久保寺さんの所属する部隊は北朝鮮に移動して、米軍上陸に備えて爆薬を抱えて米戦車のキャタピラの下に潜り込む訓練をしているときに敗戦を迎えました。しかしそこで久保寺さんの戦争は終わらなかった。酷寒のシベリア抑留で5年間の強制労働に加えてさらに1000人の仲間と共に6年間、「戦犯」として中国の撫順戦犯管理所に収容されました。“鬼から人間に”生まれ変わることでできた中国の撫順戦犯管理所での体験こそ皆さんにぜひ聞いていただきたい。

第2部の講演者・姫田さんは中央大学教授で、中国近現代史研究の第一人者です。久保寺さんの証言の解説と、数え切れない中国現地での調査に基づく日中戦争の現実を解説していただきます。

主催 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<問い合わせ先 TEL 046-871-4263 松山英司>



撫順の奇蹟とは

敗戦後、ソ連軍に武装解除されて 60 万人もの日本軍将兵たちが酷寒のシベリアへ連行されて強制労働をさらされ、その内 6 万人が犠牲となった事実は知られています。しかし、敗戦から 5 年後まで残されていた一部の中から 969 人が戦犯として中国へ引き渡された事実はあまり知られていない。

1950 年の初夏、彼らが到着したところは**撫順戦犯管理所**だった。かつて日本軍が占領していた時代の**撫順監獄**で、「抗日分子」への拷問で悲鳴の聞こえなかった日はなかったそうです。皮肉にもそのときの看守長も収容された。

俺たちは戦犯ではない—— 運命の暗転におびえ、自暴自棄になり、抵抗する日本人戦犯たち。戦争が終わってもう 5 年。軍の命令に従っただけで、どうして俺たちが戦犯なんだ。しかし、彼らの中の多くの者は戦争中、捕虜や民衆を殺し、食糧を奪い、家々を焼き払い、毒ガスや生物兵器を用いて戦争犯罪を行っていた。

そんな彼らが戦犯管理所に来て驚いたのは、充実した設備に 1 日 3 度の食事、そして管理所職員による人道的な待遇でした。さらに自由な時間を与えられ、戦犯たちはそれまで経験したことのない生活を送ることとなります。

しかし、**被害者の痛みを、この戦犯たちが心から理解できる日は来るのか** —— 戦犯たちを収容し、管理した職員たちは、その誰もが日本軍によって家族を殺され、姉妹を犯され、自ら傷つき、抗日と革命に身を投じた者たちだった。

人道的な待遇と、人生で初めて与えられた、ありあまる時間のなか、やがて戦犯たちの心に変化が生じ始めました。暖かく接してくれる職員たち、彼ら中国の民衆に対して自分はどんなことをしていたのか。—— それから戦犯たちの、今に至る、“認罪の旅”が始まったのです。

撫順戦犯管理所に収容されてさらに 6 年後、認罪が認められたほとんどの戦犯たちは罪を許されて帰国した。彼らは「中国帰還者連絡会」を結成し、「日中友好、反戦平和」と基調とした活動を展開してきた。**撫順の奇蹟を受け継ぐ会**はその精神と事業を受け継ぐために結成しました。

だが、戦後 60 年を過ぎて高齢のために自ら語ることのできる人は少なくなってきました。今回は体験者の方から直接お話しを聞く、貴重な機会となるでしょう。